サイト・トランスレーションの機能と技法

楊 承淑

(台湾 輔仁大学翻訳学研究所)

This paper refers to the methodical process of sight translation as “generalized interpretation guidelines,” while the sight translation issues peculiar to individual languages are referred to as “individual rules.” Under the “generalized interpretation guidelines,” the utilization of interpreting principles, skills, and strategy is explored in three aspects: techniques in dealing with the target text prior to sight translation, effort allocation, and efficiency of interpretation. The concept of automatic transcoding mechanism is introduced as regards the issue of efficiency of interpretation. As for the “individual rules,” two syntactic linearity techniques -- simultaneous and stepping-stone methods -- are proposed for the processing of Japanese texts with kanji characters.

はじめに

サイト・トランスレーション（本稿では、以下サイトラと略す）とは原稿付き通訳であるとする一般的な捉え方がある。しかし、実際に通訳を行う際、およそ次の4種類のパターンに分類可能であり、状況に応じて、いずれかの方法が採用される。

- A. 講演者は黙ったまま、通訳者が原稿を読みながら、一気にサイトラを行う。
- B. 講演者が原稿を読んだ後、通訳者がサイトラを行う。
- C. 講演者が原稿を読みながら、通訳者が同時にサイトラを行う。
- D. 講演者が原稿を読んだり、即席講演(事前原稿にない内容の講演、または講演者が聴衆の反応を見ながら即席で行う講演)をしつつ、時に原稿に戻る。

これらのパターンで通訳を行う際、通訳者が講演者の原稿を参考にしながらサイトラや同時通訳を行う。上記のA・Bのタイプはともに逐次通訳の場合に採用され、C・Dのタイプは同時通訳の場合に適用される。これらは、いずれも原稿があるものの、講演者のパフォーマンスによりサイトラの対応が大きく左右される。そこで、サイトラ

YANG Cheng-shu, “Sight Translation: Functions and Techniques”

Interpretation Studies, No. 1, December 2001, pages 21-35.

(c) 2001 by the Japan Association for Interpretation Studies

を行うに当たって想定される事項を表 1 にまとめ、以下の各項目について諸問題を検討する。

- サイトラの研究問題と考察範囲
- サイトラの一般原則と個別規則
- 原稿の事前処理・注意力の配分・通訳の効率
- サイトラにおける漢字介在の問題

表 1：講演者のパフォーマンスと通訳者の対応

講演者のパフォーマンス		通訳者の対応	
原稿内容 変更せず	A. 黙ったまま	A. 原稿を黙読しながら、一気にサイトラを行う。	逐通
	B. 原稿を読む	B. その後、段落毎にサイトラを行う。	逐通
	C. 原稿を読む	C. 同時にサイトラを行う。	同通
原稿内容 変更あり	D. 原稿を読んだり即席講演をしつつ、時に原稿に戻る。	D. 講演者の原稿を参考にしながら、サイトラや同時通訳を行う。	同通 * 生同通
スピード	A. 制限なし	A. 時間制限なし。	逐通
	B. 速い／普通／遅い	B. 時間制限は些か受けるが、ある程度自由。	逐通
	C. 速い／普通／遅い	C. 時間制限を受ける。	同通
	D. 速い／普通／遅い	D. 時間制限を受けながら、原稿に要注意。	同通 生同通

* 「同通」は原稿付きの同時通訳を指す。「生同通」とは原稿なしの同時通訳を言う。

1. サイトラの研究問題と考察範囲

サイトラを考えるに当たり、それを「原稿付き通訳」と見なすならば、原稿が介在する際の通訳における技法 (technique) が問題とされる。通訳の技法とは、通訳の原則 (principle) に基づき、スキル (skill) を身に付けた上で、それらを総合的に運用できるストラテジーを理解することである。スキルとは、技術の練磨により効率の良い通訳方法を身に付けることを指す。ストラテジーというのは、通訳現場の状況に応じて最適なスキルを選定し、円滑に通訳を進めていく方法を言う。メディア情報の性質に基づいて考えれば、サイトラとは文字から音声へと変換することでありながら、随時に原稿から離れ、原語の音声から訳語の音声へと変換させることでもある。したがって、サイトラを巡る問題とは、逐次通訳であれ同時通訳であれ、通訳全般の本質を表わすものであるとも言える。

具体的な考察項目については、準備段階の原稿の扱い方、通訳時の原稿の扱い方、原稿に対する注意力の配分、原稿から逸脱した際の対応、漢字圏通訳における漢字と英字の訳し方、などの点がサイトラ研究で取り上げられるべき問題であろう（表2）。

表2：サイトラの考察項目

サイトラの考察項目	通訳スキル	通訳ストラテジー
準備段階の原稿の扱い方	情報の焦点を見出す。 原稿に記号を付ける。	数字や用語の有無を確認。
通訳時の原稿の扱い方	文字から音声への変換。 原語音声から訳語音声へ。	訳語原稿を読上げるか、 原稿を見ないことにする。
原稿に対する注意力の配分	数字・用語・並列情報を 焦点に。	原稿は参考程度、原語音声を 重点に聞き取る。
原稿から逸脱した際の対応	原語音声の理解を優先に。	原稿から離れる。
英字原語と記号の訳し方	英字原語と訳語を併用。	英語を共通語にする。
漢字圏通訳における漢字の訳し方	原文の漢字を保存+意識。	漢字を最大限に生かす。

上記の各項目に示したごとく、本稿はサイトラの原稿を対象にした考察を行う。その際、刻々と変化する各種の通訳形態に対して採用すべき技法の問題を、分析の視点に据える。そうすることにより、サイトラと通訳に関する基本的な問題を階層的に明らかにし、原則論から技術論へと展開しながら、いかなる対策を講じるべきかという点について、通訳の理論と実際に基づき、段階的に検討を進めて行く。

2. サイトラの一般原則と個別規則

ここで取り上げた「一般原則」とは、サイトラを行う際に一般化できる原則のことを言う。つまり、言語を問わず、すべての言語間のサイトラに適用できる技法のことである。それに対して、「個別規則」とは個別の言語間のみで生じるサイトラの技法においての個別問題である。本稿では、漢字圏通訳におけるサイトラ特有の問題を提起したい。詳細な考察は第4節で行うことにする。

まず、サイトラの一般原則について、前節の表（表2）のように「通訳スキル」と「通訳ストラテジー」に掲げた各項目を中心に、下記①～⑥に基づき、内容の検討を進める。

①情報焦点の提示

情報焦点 (information focus) には2つの意味があると考えられる。ひとつは話し

手や書き手が伝達しようとする重要な情報を指す。おもに 5W1H (what, when, where, which, who, & how) を中心とする情報の中核を成すものである。もうひとつは通訳時に変換困難な情報——数字・専門用語・並列情報（複合名詞や複数語彙の並列）などのことである。実際の通訳において、この2つの情報焦点を速やかにポイント・アウトして伝えるには、文脈上の重要度よりも通訳時の難易度を優先的に考えなければならない。ここでは、通訳の目的や問題解決を優先的に考えるための情報提示を行うべきである。

② サイトラ記号の付加

通訳原稿にいかに効率よく記号を付けるかという問題は、サイトラ技法の中核的なポイントである。それに関わる問題として、上記の情報焦点を提示するためにハイライトや下線などの記号を加えるほか、読むために書かれた文を、通訳用に短く区切る方法を考えなければならない。いわば、原語に対するセグメンテーション (segmentation) であり、原語と訳語の語順・語法をなるべく一致させるように訳出していくことを目的とする。通訳スキルとしては “syntactic linearity” と呼ばれ、フランス語では、ソーセージを切ることに喩えて *saucissonnage* と表現される。この同通サイトラを意識した記号の付加は、「一般原則」に基づき考えれば単純な作業であるが、語順や文構造の大きく異なる言語間のサイトラにおいては、極めて難しい手法である。詳しい考察は後述の「個別規則」に譲る。

③ 文字から音声への変換

サイトラと原稿なし即席通訳（生の逐次通訳と同時通訳を含む）との間の違いを比較した場合、サイトラの特徴とは、視覚による文字情報が聴覚中心の音声情報に変換されるという点である。通訳の技術の難易度のみを論じれば、文字メディアが介在するため、サイトラのほうがむしろ負担が大きいと言えよう。そこで、読むための表現を聞くための表現に変換することにより、聞きやすくするという配慮をしなければならない。たとえば、「下記のように規定される」という表現を「規定はこういうふうになっております」と言い換える。また、書き言葉にしばしば見られる書面語的な表現に基づく情報を、伝えやすく、かつ分かりやすくするよう、口頭語に置き換えたり、言葉を補ったりすることが原則となる。場合によっては原稿を事前に訳しておき、通訳時に通訳原稿を読み上げることもある。それは、原文が堅い文体であることにより即席通訳が困難になるのを避けるためであろうし、また、格調の高い通訳をするためでもあろう。

④ 原語音声から訳語音声へ

サイトラを行う際に、原語音声から訳語音声への即席通訳が必要とされるのは、講

演者が急に原稿から離れて内容を付け加えたり、脱線して即席講演を始めたりする事態が生じるためである。しかし、サイトラという行為は、原稿文字・原語音声・訳語音声との3要素より構成されるものではあるものの、実際に通訳を進める際、その本質と目的を忘れ、これら3要素の優先度を同一に扱うようなことがあってはならない。すなわち、原語音声>原稿文字>訳語音声といった優先順位でなければならない。とくに原語音声への理解は、講演者の発信内容を忠実に伝える基本と言えるので、原稿にとらわれることは本末転倒と言うべきである。

⑤英字原語や記号の訳し方

サイトラでもっとも大きな特徴と言え、原稿の干渉にかかわる問題であろう。上記のように、時間軸に沿って生じた文字と音声との切り替えの問題は、通訳の技法に関連することであり、通訳進行中に発生する注意力の配分に関する問題でもある。しかし、そもそも原稿で使用されている英字原語¹⁾や記号のような、いわゆる通訳者が専門業とする通訳のワーキング・ランゲージ (working language) 以外の第3言語²⁾や化学記号・数式・略語など広義的な「メタ言語」 (metalanguage) の音声化は、通訳を進行するに先だって処理できることであり、そのため、その作業を原則化させると実用価値が高い。

通訳において原語を音声化する際、意味を伝える訳はもちろんのこと、近年は3カ国語以上のリレー通訳が多いことを考慮し、原語の音声を保存しつつ、それを訳出することも考えなければならない。そこで、原語音声の保存により、共通性のある情報を共有し、会議の参加者に自ずと蓄積されている既存のデータ・ベースに働きかけることは、相互のコミュニケーションに役立つ手段となる。

⑥漢字圏通訳における漢字の訳し方

中・日・韓という漢字圏諸国の間に行われる通訳の場合、漢字によって表記される人名・地名・組織名・職務名(肩書き)などの漢語が頻出する。前記⑤に述べた概念を取り入れ、対応方法を考えれば、原語の発音で発声した後、さらに訳語の発音で置き換え、その中で訳語ではどうしても通じない漢語の表現が出た場合にのみ意識する方法が考えられる。いわゆる「音声優先・漢語保存」の原則である。

上述の内容について、さらに原稿の扱い方、注意力の配分、英字原語・記号・漢語の訳し方に絞ってサイトラの原則を考えてみると、以下のようにまとめることができる。

1. サイトラ原稿の事前処理に当たって、通訳の際の変換困難な情報に優先的に記号を付加する。
2. 記号を付加するには、同通サイトラ式の syntactic linearity を基準とする。

3. 注意力の大半は原稿に向けられるのではなく、音声で伝えることに向けられなければならない。
4. 原語音声＞原稿文字＞訳語音声といった優先順位で注意力を配分する。
5. 英字原語や記号の通訳は、メタ言語としてそのまま音声化する。
6. 漢字圏通訳における漢字の訳し方につき、人名・地名などの原語音声と漢字を保存する。

3. 原稿の事前処理・注意力の配分・通訳の効率

通訳者は、ダイナミックに変化している発話の中で、講演者の音声と通訳者の手元にある原稿の文字との2つの情報源に頼りながら、通訳の構成を考えつつ、逐次的にもしくは同時に通訳を行っていかなければならない。これらの過程では、通訳者が受け身的になっている状況で、通訳者自身がコントロールできる部分においてのみ問題解決に当たることができる。つまり、原稿の事前処理、注意力の分割、および通訳の効率強化の問題として対処すべきである。すなわち、講演者から送られてくる発話のスピードが猛烈に速い場合、意味の取りづらい読み方がされる場合、または原稿からの逸脱が甚だしい場合には、通訳者は難問の処理やマルチタスク(multi-task)を避ける方法を考えるしかない。こういう時には、原稿の束縛から離れてサイトを一時中断し、生の通訳を行うよう変更すべきである。具体的に言えば、通訳者にとって受け身的な問題が発生した際、直ちに通訳の負担やタスクを軽減させることが得策である。

通訳の事前処理の原則を述べると、とくに原稿付きサイトラの場合は、まず原稿の文体をよく吟味し、実際に行われる講演者の談話スタイルに合わせなければならない。その後、最適な言葉と表現を選択した上で、通訳の言葉使いとスタイルを訳文に反映させるべきである。通訳者が講演者の分身としての代弁者 (invisible alter ego) であるためには、Nida (1969) の Dynamic Equivalence 理論によれば、訳語の聴衆にも原語の聴衆と同様の内容とニュアンスを伝えなければならない。こうした目的を達成するため、原稿に現れる頻出文型や文の長さ、また言葉の使用域 (register)、語気を表わすモダリティーの表現などを確認し、講演者の談話スタイルと一致するような訳語バージョンを作り上げることに努めなければならない。

しかし、一方、時間・空間・貨幣・立場などに関わる物事の基準や物差しの訳では、上記の状況に反して、訳語を受け取る側の聴衆の思考パターンに合わせなければ、聴衆にとって容易に理解しがたいものとなる。たとえば、日本の年号を西暦にすること、もしくは、時間 (e.g. 「7時15分前」を「6時45分」に) や空間 (e.g. 「マイル」を「メートル」に) の表現方法を変換すること、金額を訳語の国の貨幣単位に換算すること、「我が国」のような表現を「日本」などで明示することなどが典型的な例である。サイトラの場合は、事前にこのような原則に基づいて変換しておき、原稿に書き入れておくことが通訳の効率を確実に高めることにつながる。

原稿の事前処理技術の具体的な方法については、第1節でも触れたように、文脈上においての重要な情報を選び出し、ハイライトを付ける。この結果、原稿にある最も重要な情報だけに注意を向けつつ、いつでも原稿から離れたり、また原稿に戻ったりすることができるようになる。情報焦点を収束させることによって通訳内容を提示することができ、通訳の手助けになる。

続いて、数字・専門用語・並列情報をピックアップし、事前処理を行う。たとえば、数字の書き方を変えて分かりやすく書き直す (e.g. 1,350,000 を 135 万に)。つまり、情報の簡略化と明瞭化を図るわけである。

また、専門用語の場合は事前に訳しておいたり、原語を付け加えたり、原語の発音を調べておいたりする。すなわち、こうした作業を行うべき対象は、人名・地名・組織名・専門用語などであるが、これらは文脈の流れにおいて既知の情報ではなく、未知の新情報に当たるものである。そのため、明確にハイライトで表示し、正確かつ相手の立場に立った表現を採用すべきである。言葉を発する際、表示を確認しながら、極く短いポーズを入れてから発声するようにすれば、聞き手に新情報を受け取るための余裕を与えることができる。

さらに、並列情報においては、それぞれ下線を付することにより、一連のユニットとしての情報の関連性をはっきり示すことができる。発声する時の要領は専門用語と同様であるが、言葉の並列関係を示すため、中断せずに一気に述べなければならない。このような事前の情報整理作業が、とりもなおさず通訳のパフォーマンスの向上につながるのである。

そのほかに、原稿を見ながら外国語に訳す場合には、事前に発声しやすい訳を付けたり、滑らかに訳す自信のない箇所には訳語を入れておく必要がある。つまり、サイトの事前準備作業に当たって、通訳のパフォーマンスを想定した上で行い、また通訳の難点を事前に予知することが、情報の難度を緩和させることになる。

最後に、意味が不明瞭なところや理解できない箇所があった場合に、原稿の作者に聞き、内容を確認する。これは、通訳と翻訳との間における制限上の差異であるが、事前に原稿作者に確認できる通訳だけのメリットを最大限に生かすべきであろう。もちろん、原稿内容のみならず、原稿の扱い方も同時に確認できる。通訳時に原稿作者の発言内容が本来の原稿から外れる可能性もあるが、こうした確認作業の積み重ねにより、通訳者がインプットされる情報の質を向上させることができる。

なお、リレー通訳の場合であれば、このように事前処理した原稿をコピーして、他の言語の通訳者に渡しておくことも忘れてはならない。こうした配慮は、通訳の質を高めることに役立つものである。

このように、情報焦点の収束・情報の明瞭化・新情報の提示・情報の関連性・情報の難度などの諸点が持つ問題を事前に明らかにすることは、きわめて重要となる。したがって、それらの問題に対応するため、情報元へ確認し、通訳者の間で情報交換を

行うことは、原稿を事前処理する段階の作業として、サイトラの欠くべからざるスキルであると言える。

次に、注意力の配分の問題について、サイトラと同時通訳が交互に行われ、リアルタイムに注意力の配分が要求される最も厳しい状況を想定しつつ分析を行ってみたい。こうした場合には、通訳者の注意力は3つの面に振り分けられなければならない。そのうちの2つは通訳者にインプットされるものであり、すなわち、原稿の内容と講演者の発言である。もうひとつは通訳者が原稿と発言の情報を受けながら、同時にアウトプットしなければならない通訳内容のことである。

すでに、Gile (1995) の Effort Model の処理容量 (processing capacity) の研究で述べられているように、通訳の行動は、聴取／分析・産出・記憶・調整 (SI=L+P+M+C) という、注意を集中すべき4つの側面によって構成される。また、そこで明らかにされているごとく、同時に運用される処理容量の合計は限られた必要処理容量の合計を上回することはできない。言い換えれば、時間の制限を受けながら、その時間軸における処理容量は限られているということである。しかし、上述のように、サイトラの原稿を事前処理する段階の作業内容と方法は、通訳前の処理過程において行われるものであるから、実際の通訳の現場での時間制限を受けることがない。一方、通訳の処理容量を最大限に生かすためには、発話の内容に対する予知能力を培うことと、通訳の自動産出メカニズム³⁾を作り上げることについて考察する必要がある。つまり、インプットされてくる情報内容を聞きながら、その次に出てくる内容を予知できれば、情報の聴取と分析に対する労力は大いに省ける。そのため、通訳者が原語と訳語の談話分析にあらかじめ努力を傾注することが重要となる。そこで、通訳で常用される談話形態 (discourse pattern) の構造を分析し、談話の「類型」(typical) を把握することによって、実際に発話の内容を聞き取りながら、それとの比較対照を行い、発話が展開する脈絡を予測する。

また、アウトプットすべき通訳の訳出という点について見れば、談話内容の訳語側の表現に対する理解を深めることは、通訳の自動産出に大きな役割を果たす。サイトラに限って言えば、原稿に頻出する常用語彙 (frequently-used words) や常套句 (formula) を集め、対訳を検討し、それに基づいて常に練習を重ねることによって通訳の自動産出を図る。これらはいずれもマクロ的に通訳の自動産出メカニズムを構築する方法である。一方、ミクロ的には、文と文の間にリンクされている接続関係を分析し、常用される接続語や接続関係を持つ文節の対訳を検討し、それを通訳の自動産出に用いる方法も有効である。

こうした自動産出メカニズムを通して、通訳の効率を高めるためには、言葉の面のみならず、通訳者が長期記憶している百科全書のごときデータ・バンクを使いやすいように築いていくことも視野に入れなければならない。それに加えて、通訳の技法 (technique) に関連するスキルとストラテジーなどの運用により、この自動産出メカ

リズムを形成することができる (Yang, 2001)。以下にサイトラに関連する問題のみを取り上げて考察を行う。

サイトラの技術として、ここでは「拡充法」(expansion)、「リンキング」(linking)、「順送り訳」(syntactic linearity) の3つのスキルを取り上げたい。「拡充法」とは、基本的には第2節の③「文字から音声への変換」で述べたものである。そこで述べた点のほかに、書面用の長文をいかに口頭表現にふさわしい短文に分割するかについてルール化することも、拡充法のひとつのスキルである。その際、多用される最も典型的な例は、関係節の前にセグメントを入れることである。英語では that/which/where/what/who などの関係詞を目当てにすればよいが (松本・向・中沢 1976: 78-79, 281-286)、日本語の場合、それに相当するのが「という」である (楊 1997)。文を区切った後に、後半の文頭の前にさらに「この点については」「このようなことは」「つまり」などの接続語で繋ぐ。これは「リンキング」の方法のひとつでもある。

「リンキング」とは文と文の間に存在する接続関係を処理する手法である。これはおもに論理関係・前後順序・補足説明の3点からまとめることができる。それぞれの下位分類と用例は次のとおりである。

論理関係：因果（ので、から）・条件（もし、なら）・逆接（しかし）・対比（一方）
・限定(ただし)。

前後順序：順接（そして、それから）・転換（さて）・回顧（顧みると）

補足説明：添加（なお）・補足（また）・解説（というのは）・例示（たとえば）・換言（つまり）・強調（とくに）。

上記のリンクを使って、サイトラの文章を区切ったり、分かりやすくさせるための補足説明を加えることは、訳文を明晰なものにする上で大いに役立つ。そもそも、口頭による伝達における文の長さは限られているので、長すぎると、情報量が多すぎるため、聞き手と話し手の双方にとって負荷の大きな情報となる。その結果、言いづらく、分かりづらいものとなりがちである。そのため、「リンキング」の方法を用いて短文で表現することが、口頭表現によって表わされる通訳に最もふさわしい手法と言える。

「順送り訳」とは、第2節の②ですでに触れたように、原語と訳語の語順・語法をなるべく一致させるように訳出していくことである。これは、基本的には原語と訳語の間に存在する語順上の一致点を見出し、その部分だけを先に訳出するという方法である。これが応用できない箇所に対しては「拡充法」や「リンキング」などの方法を用いつつ、不足分を補い、過剰な表現をカットしながら、一文内の語順を調整する。

以下に、実例 4) をもって説明する。サイトラの記号として、原語では斜線を入れ、訳語では句読点を付加することにする。両者の関係を比較対照しながら、「順送り訳」の手法を考えよう。

原語①：アジアの、/あるいは/ 東南アジアの近代美術とは何か、/ ということをお考えるときに、/ 注目すべき点は / 2つある / と思います。/ ひとつは、/ 東南アジア/ あるいは / アジアの近代美術は、/ 他者としての、/ 幻想のアジアを / 自分の手に / 奪い返すことだった、/ ということです。

訳語1：亞洲的、或者說，東南亞的近代美術，究竟是什麼(面貌)? 這個問題在思考的時候，值得注意的，有兩點。我認為，第一點，東南亞、或者是，亞洲的近代美術，是亞洲以外的人，幻想出來的亞洲面貌。而把這個虛幻的亞洲，在自己人的手裡，重新搶回來的過程，就是亞洲美術的歷程。

この技術を行うには、文を短く区切る作業をするため、上記の「拡充法」や「リンキング」を応用することになる。また、原語と訳語の組み合わせにより、訳出する際に増減すべき部分や語順を調整すべき部分も大きく異なる。たとえば、網掛けの箇所が重複による増訳である。「我認為」の語順は前文の文末から、後文の文頭へ持っていくことになる。そして、「而把這個虛幻的亞洲」の「而」と「就是亞洲美術的歷程」の「就是」は、ともに「リンキング」の「補足説明」の手法に当たる。このように、「順送り訳」の検討は両言語の組み合わせのみではなく、どの原語からどの訳語に訳すかという組み合わせを考慮しながら、それぞれ必要とされる手法を検討しなければならない。

原則に基づき、技術を身に付けた上で、それらを総合的に運用するには、ストラテジーが求められる。具体的に言えば、①準備の仕方 ②補助的な作業 ③表現方法の選定 ④技術の運用である。

①の場合に取るべき方略とは、まず原稿の内容や発言の進行の手順を知り、その後、対応の方策を定め、事前準備作業の優先順位を決めることである。

②場合によっては、専門性の高い用語などが原稿と異なる表現で表わされた際に、対応策として、救援できる人を通訳者の側に付けることが必要となる。

③談話スタイルを定めるには、書き言葉の使用度合い、文の構造および語気を表わす終助詞の有無などがチェック・ポイントになる。

④同通のサイトラなどで、修辭性の高い文章 (e.g. 広告のコピーや詩歌) や情報密度の濃厚な文章 (e.g. 3つ以上の複合詞が並列されている場合等) に対しては翻訳を入れておくことが考えられる。

これらのストラテジーの運用は通訳の実践に基づくもので、通訳の進行を想定して考えなければならない。正しい方略の策定によって、通訳の準備と産出の効率がともに向上することになる。

上述のように、通訳の自動産出のメカニズムを形成するためには、通訳の原則とスキルのほかに、ストラテジーの運用方法を把握し、さらにマクロ的な次元において言語・知識・技法の自動産出の上層構造を構築する必要がある。複数作業の同時進行を

行う通訳活動に対応するには、多層的なアーキテクチャを築き、自動産出が可能となる部分を拡大させ、そこで得られた知見を次第にデータ・ベース化していくことが通訳の高効率化を実現する究極の方法であろう。

4. サイトラにおける漢字介在の問題

サイトラの研究において、前述各節で述べた「一般原則」のほかに、個別の言語間のみで生じる問題は、個々の言語の組み合わせによって大きく異なる。ここで、漢字が部分的に介在する日本語のサイトラ原稿を原語にして、それを直接中国語や韓国語に通訳する場合、および、いったん日中通訳を介して漢字の分かる中英通訳者などがリレーで英訳する場合の原稿の扱い方とスキルについて考察したい。前者は原稿の内容を理解できるが、後者は認識可能な漢字だけ拾い読みすることしかできない。

この問題を巨視的に考えれば、原語と訳語との間に共有できる言葉がかなりの割合で存在する時、原語の中に一部認識可能な言葉が存在する場合の通訳の対応問題として扱うことができる。したがって、共有する言葉が漢字でなくても⁵⁾、ほかの両言語の間に同様の状況が生じることもある。たとえば、おそらく英語以外の言語をワーキング・ランゲージとする通訳者にとっては、漢字よりも、むしろ英字原語の対応問題がテーマとなる。小論はこのような問題意識を視野に入れつつ、漢字介在の問題を提起することにした。

原稿において漢字が担う役割は、通訳者にとってのインプットとアウトプットの両面から分析することができる。そこで、この両者について述べると、インプットとは、原稿において漢字によって情報入力機能が果たされることを指し、アウトプットとは通訳の産出において漢字によって情報出力機能が実現されることを言う。

漢字によって提供される情報の内容は、いわゆる情報焦点・高密度情報・新情報であり、扱いにくい性質を持っている。これらはまさに前節で述べた原稿事前処理の手法が採用される対象となる。もちろん、原稿の内容が理解できる通訳者と、拾い読みしかできない通訳者とでは、漢字に対する処理方法と利用方法は異なる。前者にとっては、原稿内容の概要を示すことができ、ハイライトされた情報焦点に頼るだけで、内容のアウトラインを把握することができる。

漢字による情報には、漢語の複合詞によって形成される並列情報が多々あるため、そこでは漢字によって高密度な情報が提供されていると言える。また、文脈の前後関係から見て、混入する人名・地名・組織名・職務名などの新情報には漢語が多く、それゆえ、それらによっても高密度な情報が示される。そのため、リレー通訳を受ける通訳者にとって、見知らぬ他国の固有名詞が出現しても、その漢語や英字原語に下線を加えることにより、日本語原稿をそのまま提供しても理解するだけの手がかりを伝えることができる。

原稿において漢字が果たすアウトプット機能について、上記の情報焦点・高密度情

報・新情報という情報性質を利用して、サイトラの「順送り訳」を例に問題点を述べたい。ひとくちに「順送り訳」と言っても、原語にそのまま従って順送り訳を行う「同通方式」と、漢語を飛び石のようにして順送り訳を行う「飛び石方式」とが考えられる。両者の定義と相違点は次のようにまとめられる。

「同通方式」：原語の文章や音声の語順に沿って原語に順応することを前提に、小幅に原語を補填もしくは削除したりして、なるべく原語と同様の順序で訳語を訳出していく。

「飛び石方式」：原語の文章や音声の情報焦点に沿って訳語に順応することを前提に、やや原語の表現方法を変えて、なるべく原語と同様の意味で訳語を訳出していく。

以下に、前出の例を再度利用しながら、両方式の「順送り訳」を比較してみよう (Yang, *op. cit.*)。

原語①：アジアの、/ あるいは / 東南アジアの近代美術とは何か、/ ということを考えるときに、/ 注目すべき点は / 2つある / と思います。/ ひとつは、/ 東南アジア/ あるいは / アジアの近代美術は、/ 他者としての、/ 幻想のアジアを / 自分の手に / 奪い返すことだった、/ ということです。(同通方式)

訳語 1：亞洲的、或者說，東南亞的近代美術，究竟是什麼(面貌)？這個問題在思考的時候，值得注意的，有兩點。我認為，第一點，東南亞、或者是，亞洲的近代美術，是亞洲以外的人，幻想出來的亞洲面貌。而把這個虛幻的亞洲，在自己人的手裡，重新搶回來的過程，就是亞洲美術的歷程。

原語 2：アジアの、あるいは東南アジアの近代美術とは何か、ということを考えるときに、注目すべき点は2つあると思います。ひとつは、東南アジアあるいはアジアの近代美術は、他者としての、幻想のアジアを自分の手に奪い返すことだった、ということです。(飛び石方式)

訳語 2：亞洲、或者是東南亞的近代美術究竟是什麼面貌，這個問題在思考的時候，值得注意的有兩點。第一點，東南亞或亞洲的近代美術，是亞洲以外的人，自己幻想出來的。而把這個虛幻的亞洲，搶回來自己人手裡的一段過程，就是亞洲美術的歷程。

これは講演の冒頭のイントロであり、新しい主題を紹介するのであるから、主語や目的語が情報焦点となる。原語の下線の箇所を見れば、事実上、これらの情報が漢語によって構成されているものであることが知られる。訳の手法については、訳語 1 と訳語 2 で両方式の「順送り訳」を説明する。

原語①で採用されたのは、原稿に基づきながら、通訳の同時産出を意識した上で行われる手法である。そこでは、主語や目的語の適切な重複（「這個問題」、「（亜洲）面貌」、「這個虚幻的亜洲」、「亜洲美術的歷程」、語順の調整（文末にある「と思います」を、文頭に「我認為」を移行させる）およびリンクの付加（「而」、「就是」）もしくは言葉の前後に補填したり削除したりする（「他者としての」の「として」はカットされた）などを行い、原語と訳語の流れを一致させることが重点となる。また、訳語の選定には、なるべく原語の漢語に類似した表現を採用する。つまり、訳語にも適用できるならば、原語の漢語をそのまま使用する。漢語は、このスキルの各項目を行う際、文を形成するに当たって、その語形と内容を最小労力で最大限に利用できる転換機能を有している。

原語 において、漢語は主語や目的語などの情報焦点として捉えられ、その言葉の前後に補足したり削除したりすることを行う（原語 の網掛け箇所は削除された例、訳語 2 の網掛け箇所は補足された言葉）。また、講演者が自分で作った用語である新情報——「他者としての、幻想のアジア」について、原語の構造を変え、自然な訳語に直して表現する。訳語の流れという点を重視し、大きめの文節に改めて同様の意味内容を伝達する。このように、漢字には発話内容に関する概念を形成させる機能があると同時に、それが情報焦点としての役割を果たし、通訳者はそれを訳出してから次第に関連情報を補って行くために、「句構造標識」(phrase marker) としての機能もあると言えよう。

漢字を含む日本語サイトラ原稿を中国語や韓国語に通訳する場合は、原語と訳語との間に漢語が共有されるため、それを情報焦点として、最大限にその力を発揮させることが通訳の入力と出力には極めて役立つ。また、漢字を拾い読みしかできない通訳者がリレー通訳を行う際、各通訳者間で、サイトラ原稿に現れる人名・地名・書名・組織名・職務名などの固有名詞を提示し合うことによって、通訳を確かなものに行うことができる。さらに、漢字のコミュニケーション機能を利用することによって、他国の未知の用語に対する誤解も避けられる。この点に関して言えば、英字原語のサイトラ原稿を扱う際にも、リレー通訳において同様の方法を応用することができる。

5. 結び

本稿では、サイトラを行う際に一般化できる対応策を「一般原則」として取り上げた。さらに、刻々と変化する通訳の諸状況に応じて、原稿の事前処理・注意力の配分・通訳の効率などがいかに施されるべきかについて、通訳の技法の面から検討を行った。そこでは、通訳の効率化のために通訳の多層的な自動産出メカニズムの構築を提案し、通訳に関連する言語・知識・技法の基本問題に触れつつ、さらにサイトラに関する原則、スキルとストラテジーの具体例を述べた。

一方、個別の言語間のみで生じる問題を「個別規則」として取り上げ、漢字圏通訳

間における漢字介在の問題を扱った。とりわけ漢字が部分的に介在する日本語のサイトラ原稿の扱い方に焦点を当て、「同通方式」と「飛び石方式」における「順送り訳」の相違点を述べつつ、さらに原語の分かる通訳者と拾い読みしかできないリレー通訳者の対応方法について比較検討を行った。

「一般原則」は一般化が容易であるかのようなようであるが、実際の現場ではダイナミックな変化に応じて速やかに対応する実践力が求められる。そのため、省力化を図ることを目指すスキルと、臨機応変の対応を重んじるストラテジーは、通訳の進行とともに、常に同時に運用されなければならない。

それに対して、「個別規則」は各々の言語の組み合わせに応じて詳細に検討されるべきものであるとは言え、実施するに当たり、それぞれの規則に従うことが可能なので、通訳作業の自動産出メカニズムのシステム化を期待できるであろう。しかし、これを実現するにはなお明らかにすべき問題が少なくなく、今後、この点を課題としてサイトラの研究を深めることが必要である。

著者紹介：楊承淑 (YANG Cheng-shu) 台湾 輔仁大学 翻訳学研究所 助教授。台湾翻訳学会 会長 E-mail: <flcg1009@mails.fju.edu.tw>

【注】

- 1) ここで提起した「英字原語」とは原語表記で表わされる略語やラテン語を指す。
- 2) 通訳者のワーキング・ランゲージ以外の第 3 言語とは、英語通訳者以外の場合には英語を指す。
- 3) Anderson (1994) によって提案された言語変換 (recoding) であれ、Nancy Schweda Nicholson (1996) による自動産出の記憶研究であれ、自動産出に基づいた automatic transcoding mechanism は通訳の処理法として考えられるものとされる。
- 4) 2001 年 7 月 22 日 台北市立美術館で開催された「アジア太平洋地域における近代美術の現代化講演会」による (講演者：後小路雅弘、演題：東南アジアにおける「美術」の誕生－日本の観点から)。
- 5) 日本語におけるカタカナ語を英訳する際にも、漢字と同様の状況が生じると思われる。

【引用文献】

- 松本兼太郎・向謙治郎・中沢弘雄 (1976) 『英語通訳への道』大修館書店
- 楊承淑 (1997) 「日中サイト・トランスレーションにおけるセグメンテーションについて」『通訳理論研究』第 3 巻第 12 号：4-17. 通訳理論研究会
- Anderson, L. (1983). *The Architecture of Cognition*. MA: Harvard University Press.

- (1994). Simultaneous interpretation: Contextual and translation aspects. In Lambert, S. M. & Moser-Mercer, B. (Eds.), *Bridging the Gap: Empirical Research in Simultaneous Interpretation*. Amsterdam: Benjamins.
- Gile, D. (1995). The Effort Models in interpretation. In *Basic concepts and models for interpreter and translator training*. (pp.159-190). Amsterdam: John Benjamins.
- Nicholson, N. S. (1996). Perspectives on the role of memory in interpretation: A critical review of recent literature. In Jerome-O'Keeffe (Ed.) *Global Vision : Proceedings of the 37th annual Conference of the American Translators Association, Alexandria, VA : ATA*.
- Nida, E. A. (1964). *Toward a Science of Translation*. Leiden: E.J. Brill.
- (1969). *The Theory and Practice of Translation*. Leiden: E.J. Brill.
- Yang, C.S (楊承淑) (2001). The Three Components of Interpreter Training: Language, Knowledge, and Technique. *The 1st International Conference on Translation and Interpretation Studies: Theories of Translation and Interpretation & Problems in Korean Translation and Interpretation*. (pp.33-45). Seoul: BK21 Specialized Project in Translation and Interpretation, Graduate School of Interpretation and Translation, Hankuk University of Foreign Studies.